



TITLE:

第48回研究部員会議 第49回運営委員会 議事録

AUTHOR(S):

CITATION:

第48回研究部員会議 第49回運営委員会 議事録. 物性研究 1970, 13(4): 273-314

ISSUE DATE:

1970-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87253>

RIGHT:

第48回 研究部員会議 議事録 第49回 運営委員会

第48回基研研究部員会議議事録

1969年11月6日・7日

於 基 研 小 講 義 室

議 長 田 中 正

木 下 紀 正

長 岡 洋 介

出席者	運営委員	11名	} 40名
	研究部員	21名	
	所 員	8名	
	オブザーバー	6名	

議 題

1. 議長団報告
2. 基研報告
3. 外人招聘
4. 研究会・アトム型研究員等、旅費・滞在費規定について
5. 基礎物理学の将来 第1回
 - ① 原子核将来計画についての報告
 - ② 素粒子論の現状と将来

問題提起・討論
6. インフォーマル・ミーティング
 - 素粒子・原子核関係 科研費について
 - 物性関係 基研に関するアンケートについて
7. 数研専門委について
8. 来年度の研究計画の方針
9. 基研のあり方

所長問題
10. 宿舍について

資 料

1. 所長選考と研究部員会議との関係
1957年11月研究部員会議議事録抄録
2. 京大基研・数研共同利用研究者宿泊所利用規準
3. 物性アンケート“あなたは基研を知っていますか”

1. 議長団報告

議題の説明と議事進行の予定の説明

2. 基研報告

所員異動

- a. 転入, 採用, 昇任 岩崎洋一助手 昭44.8.1付採用
- b. 転出, 退職 なし
- c. 外国出張 中野武宣(助手) 昭44.9.1~45.8.31

アメリカ

d. アトム型

- 買場 政之(名大・D3) 44.7.5~8.15, 44.9.28~10.15
生井沢 寛(成蹊大・講師) 44.7.15~9.6
秋元 興一(“・助手) 44.8.1~8.31
石田 晋(日大・講師) 44.9.1~9.30
林 浩一(東大・研究員) 44.9.1~10.31
植山 宏(阪大・助手) 44.7.21~9.20
高木富士夫(東北大・助手) 44.9.16~10.15
猪野 武敏(島根大・講師) 44.9.1~9.30
庄野 義之(広大・講師) 44.9.25~10.18
柘殖 昌保(阪大・D3) 44.10.1~11.30
蔵本 由紀(九大・助手) 44.10.13~11.22
小柳 義夫(東大・D2) 44.10.11~11.9
山田 知司(九大・助手) 44.10.13~11.12
宮崎 忠(東大・D2) 44.10.15~10.29
大成 逸夫(“・D3) 44.11.1~11.30
倉田 泰幸(東北大・助手) 44.10.18~11.17

e. 外人招聘

Arnold J.F. Siegert 米国ノースウェスタン大学。教授

44. 7. 1 ~ 7. 31

Murray Peshkin 米国アルゴンヌ国立研究所。主任研究員

44. 8. 1 ~ 8. 31

Vladimir Dvorak チェコスロバキヤ科学アカデミー。研究員

44. 9. 1 ~ 9. 30

Gerhard Borner マックスプランク研究所。研究員

44. 10. 1 ~ 45. 3. 31

Michel Borghini セルン 上級研究員

44. 10. 1 ~ 10. 31

Hans Albrecht Bethe 米国コーネル大学。教授

44. 10. 1 ~ 10. 31

f. ① 学振流動研究員 なし

② 学振奨励研究員 なし

③ 外国人流動研究員 Nalin Chandra Wickramasinghe

44. 9. 15 ~ 12. 14

3. 外人招聘

今年度予算 物性研に10月から3月まで滞在されている W. R. Datars 氏に滞在費1ヶ月分を出すことが認められた。

尚、今年度予算はあと1ヶ月分位残っている。心当りの方は申し出ていただきたい。

来年度予算 ・ Abrikosov (U.S.S.R. Akad. Sci) 1 ~ 2ヶ月

・ Pines (Illinois Univ.) 1ヶ月

以上認められた。

他に ・ N.M. Nieto (コーネル大) 素粒子論

・ Oglovín (フルチャマフ研) 核実験

・ Eichler (ハーン・マイトナー研) 原子核理論

の名前があったが、可能性があるということで、次の研究部員会議まで決定をのばすことになった。

又, Flato

Sternheimer Poincare Institute

Simon

招待状を出せば、旅費、滞在費は先方で負担するといっておられる。(来日の可能性があるという手紙を出す)

4. 研究会、アトム型研究員等の旅費、滞在費規定について

(現在使われている研究部員会議旅費規定、アトム型研究員の待遇、利用状況について説明があった後討論されたが)

結論として

1. 研究部員会議旅費規定の一部修正については、議長団で案を作り、次の研究部員会議にはかることになった。
2. アトム型研究員の日当については、有職者、学生の差はつけないという意見が強かったが具体的なことは、所員会で考えてもらうことになった。

尚、アトム型研究員制度について、次のような意見が出た。

- 研究室・大学の壁を破るのに、若い人が基研に多く来るのは良いことだ。
- 職についていると、1ヶ月基研に来るのは難しい。1ヶ月以内も認めて欲しい。

(1ヶ月というのは厳密に決っているのではない。次の募集のときから考える。)

- 基研が大学院生の教育をしょいこむのはよくない。

(大学院生が基研に来るときは、教育されることを目的としては来ていない。)

- 大学院生の数は多く、大体の人は基研に来ようと思えば、大学を離れることは可能だ。今後、応募者が多すぎて選考に困ることにならないか。

(大学院生も、所属研究室で落ちついて研究したいときと、基研に来たいときがある。そうむやみには多くならないと思う。)

- アトム型で若い人が基研に来ることによって、基研とその人の所属

する研究室とのつながりも深くなる。

- 。 日当を一律にするのはよいが、アトム型研究員がその内容においても一律だというわけではない。大学院クラスの人が来る場合と、シニア・クラスの人の場合では目的もちがうだろう。等

5. 基礎物理学の将来 第1回

① 原子核将来計画についての報告

小沼：核特委は4月に総辞職したが、9月から暫定核特委として動き出した。一方学術審議会は8月に素粒子研究所についての最終答申を文部大臣に提出した。核特委は4月に学審案拒否を確認していたが、ふたたび、答申にみられる学審ペースの将来計画を拒否することを確認し、研究者自らがすすめてきた将来計画の実現をめざして、7月と9月の学術会議運営審議会の決定を支持して、努力をおこなう決意を表明した。運審の決定は、素粒子研究所は学術会議の第1次5カ年計画の一環としてとりあけられるべきであり、昭和46年度から本格的な予算措置がとられ、45年度は準備費に相当するものが、当然計上されるべきだというものである。

暫定核特委は、①将来計画の総括をおこなうこと、②その上に立って今後の具体策をつくる必要があることを確認した。そのためには関係研究者全員に、この問題をもどして討論することが必要だと考え、核特委がその討論の世話をおこなうことを決めた。

現在、その線に沿った討議が進められている。11月下旬に予定されている核特委では、少くとも次の問題については討議したいと考えている。その前に今日の夕方のインフォーマル・ミーティングも含め、できるだけ各地で討論しておいてほしい。

(1) 原子核将来計画の総括

a. 当初理念（三位一体・基礎科学振興・新しい研究体制）は現在どうなっているか。

b. これまでの進め方（各グループ・核特委・学術会議）の問題点

(2) 今後の方針

a. 原子核研究を進める上での現時点での基本的考え方（学問的）

b. 現状分析（研究者・政府）

c. 将来計画をどう進めるか（素研・核物理研など）

(3) 研究者レベルでの討論の計画

山口：(1)戦後直ちに、宇宙線研究が進められたことを、三位一体に関して、ふれられたが、そのときには核実験グループは、まだ動き出していなかったのだ。三位一体が戦後直ちに始まったのではない。

(2)核特委理論委員は再選出といいながら、一方で活動が続けているのは理解できない。

(3)核特委の学審答申についての態度の中に「（学審答申は）学問的議論が全くなされず、専ら財政的判断のみによっている」と書いてあるが、核特委は、学審は学問的議論をするところではないといってきたことと矛盾するのではないか。

田中一：戦後直ちに、宇宙線研究が再建され、核研ができたとき低エネルギー優先という方針が出された。将来計画で素研設置が進められているのは、このような事情に基いている。

小沼：(2)については、理論委員が再選出されるまで、委員としての任務をはたすということになったのだ。

(3)について、核特委は、学問的討論は研究者グループの中でおこなわれるべきだと、一貫して考えている。素研の体制について文部大臣から諮問された学審が、財政的議論だけにとずいて、素研自体の可否を討議し、4分の1案の具体的加速器計画を答申したことを述べるために用いた表現である。

② 素粒子論の現状と展望

河原林氏により最近10年間の素粒子物理の発展の中で最も大きな変革の1つは、素粒子が何らかの意味で構造を持っているという認識の普遍化であろうという点が指摘され、特に、hadron dynamics に関係があると思われる最近の Dual Resonance Model - Veneziano Model - が素粒子概念に対してどのような変更を要求しているかが述べられた。

ついで将来の素粒子理論についての問題提起がなされ、活発な議論がなされた。報告の詳細は discussion, comments と共に素粒子論研究に

掲載される予定である。

6. Informal Meeting (科研費問題) — 素粒子・原子核関係。司会 牧
- 今年度「素粒子の基礎理論」, 「原子核と高エネルギー現象の理論」の両班に対し, 121万円づつの科研費(総合研究 B)が交付された。しかしこの金額は素粒子論グループ全体の研究連絡等にあててのみにあまりに僅少であって, 今後このような金額の枠にとどまるとすると何らかの打開策が必要となってくる。この点についてすでに秋の分科会の際, 素粒子論グループ懇談会でも議論され, 学術会議に対しては, 科研費総額の中で, 最近頭打ちとなっている総合研究(A, B両方とも)の比率を高めるよう適切な対策をとるように要望したが, 部員会議のメンバーである学術会議会員や物研連委員の方々にもこの線に沿って努力していただくことを確認する。

来年度の申請方法については, 谷川, 高木両班長と科研費係とで試案を練ろうとしているが, 要するに素粒子論グループ全体として一体的に運用するという線で交付額の増加を実現するためにどうしたらよいかということである。班長と科研費係とで検討した案は, 総合Bは従来通り続け, これとあわせて総合Bを基礎にいくつかの総合Aを申請してはどうかという考え方である。

この案に対して, 種々の問題点が討論されたが, もしAをBとは異なる用い方をしなければならないという場合に, 素粒子論グループ全体としての一体的運用という従来認められてきた原則的な考え方から大きくずれることにならないか, またAを総合B的に用いようとする, 会計管理のうえで無理を生じ, トラブルの材料とされる危険性が大きいのではないかと, 等の点が指摘された。

科研費係としては, 来年度申請方法に関して, これらの討論を参考に, なお技術的な検討を加えて案をまとめ, 各研究室を巡ってグループ全体で討論してもらいこととなった。

- 6' Informal Meeting (基研に関するアンケートについて) 物性関係

基研の物性研究者が中心となって, 基研についてのアンケートをとった。対象は物性グループの名簿をもとに, サブ・グループのうち理論にはグループ全員, 実験はサブ・グループの代表者, 生物物理学会員のうち基研を利用

第48回研究部員会議・第49回運営委員会議事録

したことのあつた人、アンケート依頼総数約750人、回答者総数162人、解答率は約22%であつた。

回答は基研をよく利用する人、全く利用しない人からは少く、共同利用研の必要を感じ、不満を持つ人からの回答が多かつた。

設問内容は、1) 共同利用研一般の現状について、2) 基研の現状について、3) 基研の運営方法、特に物性関係研究部員の選出方法について、に大別される。質問形式はいくつかの答から一つを選ばせるものと、各人の意見を書いてもらうものに分類される。後者の中には、例えば次のような意見があつた。

- ① 研究部員も研究会利用者も理論だけになつていく傾向がある。
- ② 共同利用研は如何にあるべきかがわからないままに研究部員も選ばれている。
- ③ 基研は理論の研究所と限定すべきではない。
- ④ 研究会開催・公募のP・Rが足りない。
- ⑤ 地方大学の研究者も利用しやすくなるべき。

等、詳細は物性研究に掲載する予定。

7. 数研専門委について

来年度の専門委について物研連から研究部員会議に推薦依頼があつたら、
長谷川 洋氏(京大理) 末包 昌太氏(阪市大理)
を推薦することになった。

8. 来年度の研究計画について

〔アトム型研究員について〕

田中一：短期アトム型研究員制度は今のところ基研しかできない制度で伸ばすべきだと思ふが、これと別にD.C.を終つた人の就職難のことも考えるべきではないか。

木下(議長) 総定員法で、助手も5%位削減になり苦しいが、アトム型を奨学的に、という要求は若手からは出ていない。

末包：現在大学院生の学外活動経費がないし、小さな大学では外から講師を呼んでくるのも難しい。ある程度集団で基研に来、そこに講師も呼ぶといふようなことを考慮したらどうか。

木下：それはモレキュール型研究計画にも近いし、現行のアトム型研究員制度でも、時期は自分で決められるので、そのようなことも可能。

湯川：1年とか半年という奨学生的アトム型は今年通りあまり歓迎しないということを明示して公募を行なうことは、はっきりしておいた方がよい。

木下：そう決めてもよいか。 反対意見なし

高田：アトム型研究員の募集は2月、6月の運営委員会するときだけでなく、その後も応募できるような方法を考えていただきたい。例えば自由研究費の枠をふやして所員の contact で行けるような枠を作ってはどうか。

湯川：数日というのなら自由研究費、旅費付談話会という枠に入るが……

牧：アトム型のみ秋にも公募したらどうか。

碓井：自由研究費というより秋にも公募した方がよい。

沢田：アトム型研究員はあまり短かいのは意味がないかもしれない。原則として1ヶ月以上とし、半月もありうる、という風にした方がよい。

板橋：中堅は所属大学での仕事に追われて出にくい。選考のとき考慮していただきたい。

山田：地方大学はますます出にくい。そういう人には期限を考慮していただきたい。

沢田：アトム型できても基研にあまりいないで理学部の方ばかりにいる人があると聞くと、応募のとき研究計画をかなりはっきり書いてもらった方がよい。

戸田：研究計画の内容によって採用が決まるのはどうかと思う。評価される場所が公開の場でないということも問題。

沢田：基研に来る目的にはバラエティがあって良く、特定の目的の人のみ採用ということにはならない。

湯川：今までは、その人の考え方によって選考するということはしなかった。応募者が多くなると選考のしかたも難かしくなるだろうが。

田中一：アトム型の新しい型としてどのような可能性があるかはいつも、部員会で討論することができる。一般に研究部員会議では、まず、現実の条件を考えないで、可能性を探る。又、この可能性の中で現実の条件を考慮するとどうなるかは運営委員会で議論される。この二つが分れている

ところが新しいものを生み出しながら運営していく基研の良いところだ。
アトム型の良い利用法を考え出したら、それを広める場としての部員会の存在は意義がある。

木下：① アトム型研究員に限り秋にも公募する。（このことを明示して2月の公募をする。）

② 期間は原則として1ヶ月以上とし、場合によっては2週間程度も認める。

③ 応募のとき基研に来る目的をかなり具体的に書いてもらう。
ということにしたい。

もし、次の公募のとき応募者が予算の枠を大巾に超過したら、2月の研究部員会議で、その調整の仕方を議論する。

〔校費だけの研究計画について〕

松田：。いくつかの大学に属する人が手紙等で連絡をとりながら研究を進め、
計算費だけを要求する研究計画

。一つの大学に属する人だけが校費だけを要求する研究計画

をどう扱うか。物性では研究計画が適当、研究室の校費が少なく、計算費が出せないというので認めた例があるが ………

玉垣：case by case で考えるべきだ。はじめは小さい研究計画で一大学の人でも、将来大きくなる可能性もあるし、一大学内でやられていた研究でも、ある人が他大学に移った時、はじめは認めず、後は認めるというのもおかしい。

田中一：わざわざ奇妙なことを言うが、費用の支出先が一大学というのが計画を認めないという原因になるのであれば、アトム型も成り立たなくなる。研究の規模が研究室の枠を越えたものが研究部員会議で support をうる点が必要な点である。

校費だけという計画は今までもいくつか認められている。

山田：全国の研究水準をあげる意味ではよいが、基研の予算は限られていることを考えると、原則的には一大学のものは他のものに比べ少し条件を悪くすることも考えるべきではないか。

田中一：核研では受け付け順に1件6万円の範囲で認める計算費の制限はパン

クするところまでいかない。

共同利用の計算センターが各地にできている。これを利用するとすれば、計算費の問題はそう深刻ではないのではないか。

結 論

今までの公募にも、一大学はだめということは明示していない。これからは“自由に新しい研究計画をお出し下さい”という文章を入れ、計画決定については case by case でいく。

〔一般の研究計画〕

長岡：物性のインフォーマル・ミーティングで出た話だが研究会・研究計画には

- ・あるテーマに興味をもつ人が、成果を持ちよる
- ・特にそのテーマに興味を持つ人でなくても、話を聞きに行く学校的なもの

があるが、特に後者の場合、早めに具体的計画を決め、物理会誌等に information をのせるようにして、聞きに来る人の便宜をはかることを、世話人は考えるべきだ。

牧：研究会の主旨・テーマについて検討しあって、夫々の研究会を開く時期も、ある程度関連づけて決められるとよいのではないか。

木下：部員会が研究計画の中味まで立ち入って議論できる場になることが望ましい。

板橋：科研費のインフォーマル・ミーティングで、素粒子関係の総合研究 A を申請するとしたら、基研の研究計画とあわせて検討するという結論は出たことを確認したい。

長岡：主として物性の問題かもしれないが、

物性グループは人数が多く、わりに散漫なグループであるにもかかわらず、そこにも含まれない地方大学の人がある。現在第1線の研究には参加していないが意志はある人と基研の関係をどう考えるべきか。

木下：素粒子にも同じ問題がある。最近大学院を出た人が就職難で、地方大学の自分の分野の仕事をしている人は誰もいない所に行かねばならなくなり、そういう話が出てくる。

山田：前に研究体制のアンケートをとったが、地方大学の人の要求は深刻だった。たびたび部員会議で話は出したが、対策をたて得ずそのままの状態。

松田：若手の就職問題も、地方大学で研究条件がよくなり、行く人が多くなれば、もっと好転すると思うが。

湯川：金沢、広島、大阪市大等、戦後かなり研究条件の良くなった所はあるが、その後、そういう所がふえない。

積極的に地方に行って条件を良くする努力をすることも必要だろう。

長岡：勝木氏がよく言われることだが、地方大学の人は研究会に出てくる余裕もない。その場合モレキュールで研究連絡をすることも良い方法だ。

田中正：素粒子では、科研費の枠の中で、研究連絡の為武者修業の制度をとっている。

長岡：それで地方大学に誰かを呼ぶことができるか。

山田：そこまでは無理。結局、武者修業ではだめで、せめて2週間位地方に来てくれる人が必要、地方大学の問題については、勝木氏が Organize して学会のたびに討論している。

9. 基研のあり方 — 所長問題

議長（田中正）：前回までの議論の上に立って、基研のあり方を論じつつ、所長問題をまとめていきたい。

湯川：所長問題は重要だが、同時に教授の後任問題でもある。所長問題を先に考えるのが筋だろう。私自身は、3月にやめることは既定の事実だと思っているから、それ以前に、予定者的な意味で選考がおこなわれてもかまわない。しかし、やめたあとでもよい、前任者は、あまり口を出さない方がよいとも思うが、参考までに。

内山：だれをとということについては具合がわるいだろうが、一般的なことについて、湯川先生からうかがうのは有意義だ。

湯川：たとえば所長の任期の問題がある。初めは、当分方針を変える必要はなかりうといので、任期をきめなかったが、京大側から具合が悪いといわれた。学内で最長の任期は、総長が4年だということなので、ここも4年とした。学内ではたいてい2年である。変えることを考えてもよい。

山口：核研所長は3年。

湯川：学部長は2年。

荒木：数理研も2年。

内山：議論すべき問題は何か。よい所長をおよびしたいと考えても、任期があると、やめたとき困らないように、教授のポストを1つあけておかなければならない。ところが世帯が小さいから、うまくいかないおそれがある。こういうことか。

議長（田中正）：それも大きな問題の1つだ。

湯川：教授として任期のない人をよべば、その人を所長として、その人のリーダーシップの下でやっていくということになるだろう。一方、任期付きの教授をよべば、所長の任期と教授の任期の関係などいろいろの面が出てくる。

内山：これまでも、そういう問題があることはわかっていたのに、湯川先生がおられたおかげで、先へ先への議論をのばして、さけていたということか。

山田：そうだ。

谷川：ある時点で、研究部員会議で任期について議論し、それを続けてきた。

山田：所長の性格の問題はにげていた。

湯川：核研の場合は。

山口：核研のスタッフは、最初のうち任期は moral obligation だった。その後、新しくくる人に任期をつけるようになった。しかし、service を duty とする人には任期をつけていない。基研・核研以外には任期付きポストがきわめて少ないので、一般には任期のきれた人がよそに移るのが非常にむずかしいという問題がある。実験の人の場合、任期の長さが問題になる。何年かかかって機械をつくり、何年か実験をするという場合、機械建設期間は任期に数えないという便法をとることとした。

所長の任期は3年で再選可能。野中氏の場合には問題なかったが、武田氏のとき問題がおこった。名前が出る前に議論したとき、一度任期なしときめた。しかしこのことはあとでひっくりかえり、現行制度では、所長在任中は、教授任期に数えないということになっている。

田中一：任期なしということは、十分議論してなかったように思う。

山口：十分議論した。野中氏の手落ちで、メモには書いてあるが、議事録に残っていないかった。

議長（田中正）：はっきりさせるべきことに、次の問題がある。

京大の停年制を直ちに共同利用研に適用してよいか。前回、湯川先生は意志をはっきりのべられたが、研究部員会議としては、はっきりきめていない。前回の長崎氏の発言とCRC実行委員長からの手紙があった。

共同利用研の停年という形で態度を決めると、他の共同利用研に影響することも大きい。よそで悪用されてもこまる。

教授として選考するか、所長人事と考えるかの問題もあり、前者の場合、所長の任期が4年のままでよいかということも考えられる。さらに集団指導についても、所内の集団指導か、全国的規模の研究者グループの集団指導か。

田中一：これまで基研が果たしてきた役割について議論されたが、肯定的発言がシンポジウムなどでも述べられてきた。CRC実行委員長の手紙の前半については、だれも賛成だと思う。それでは、どうすべきかについては、いろいろな考えがある。おそかれ、はやかれ、われわれがやっていかなければならない。多くの人が一致してみる有能な指導者がいれば別だ。来年3月の停年は、それとしてうけとめて、あとのことを考えるべきだ。多くの人が一致できる指導者がいないならば、教授としての人事を考え、運営は研究部員会議や運営委員会が中心になってやっていくべきだろう。この場合所長は、所内から出すことになる。

山口：1代目は家をおこし、2代目は維持し、3代目は大いに発展させるか、つぶす。2代目はやりにくい。あとで悪用される方法ではこまる。

湯川先生の停年後の研究所を本気で考えるべきだった。

田中一氏のいわれるロボット的所長をとるか、全世界からよい人をさがしてくるかについては、まず所長人事を考えて、だめならロボット的にするべきだ。現在は、重大な時期だから、湯川時代にきずいたものを、くずしてしまうのはこまる。

内山：CRCからの手紙は、門下生としてうれしいが、先生のお気持は、あとを安心してまかせるようにして、すっかり身をひかれないのではないだ

ろうか。実質的所長という方法は先生のためにもよくない。あとにくる所長もやりにくくて困るだろう。

小沼：田中正氏が問題として出されたことの中には、湯川先生については京大の停年をとりはらうということもある。

山田：湯川先生の意志ははっきりしているから、今停年問題にふれるべきではない。停年問題を取りあげるならあとでやれ。

谷川：基研が京大附置である以上、ここだけ別のことを考えるのはよくない。

小沼：山田さんは先生の意志がはっきりしているといわれたが、御本人が自ら逆のことをいわれることはありえない。一般論ではなく、湯川問題だ。

板橋：人によって停年を変えるのはよくない。

湯川：創立以来大体一貫した方針でやってきたが、16年というのは長い期間だ。物理と周辺の学問の関係も大きく変った。伝統もよいが、このへんで相当大きく変ってもよい。

私にとって所長としての仕事はそれほどしんどいということとはなかった。しかしここ数年はむずかしい。来年3月までは、大きな改革がおこなわれることはないだろうが。

これまで、いろいろの共同利用研で停年をむかえて、やめていく人もいた。私がこれまで長いこと所長であったことも例外的なのに、さらに停年について例外をつくるのはよくない。

議長（田中正）：一応来年停年という線を認めて、所長問題を考えたい。基研の役割を発展させるのにどうすべきかという観点から議論したい。

山口：基研のあり方について。これまで国内のセンターとしての役割をはたした。これからは国際的にもセンターとして大きな役割をはたしてもらいたい。

沢田：1代目は自由に個人力が出せた。2代目が1代目と同じように、始めからやりなおすということでよいだろうか。これまでの積み重ねを発展させることは、集団指導体制でおこなうべきで、その上についてやってもらうのに適した人をむかえるべきだ。

松田：所長は物性以外と思っていたので、適当な人がいるかどうかわからない。ただ、湯川先生が広い領域に視野をひろげ、境界領域をそだててこられ

たことは高く評価すべきだから、今後もそういうふうにやるべきだ。教授としての任期がついていない所長か、任期つき教授か（そのあとで所内から所長）のどちらかを選択すべきだろう。さきほど悪例という話が出たが。

板橋：湯川先生を特例として停年をのばすとあとで困るだろうといったのだ。

松田：ずばぬけてよい人なら例外をつくってもよいという人もいた。

山口：2つのうちの選択といわれたが、所長の期間は教授の任期にかぞえないという case もありうる。実際に任期をつけるとき、つめる必要がある。

議長（田中正）：山口氏は国際的といわれたが、image は。

山口：Princeton は世界中から多くの研究者をまねている。外国からたくさん人をよぶことも考えてもらいたい。小さな国際会議を regular に主催できるようにもしてもらいたい。

それから基研には名誉教授室をおくことになると思うが、先生が constant に働かれるためには secretary をおもちにならないと困るだろう。office, secretary, library, guest room などの計画を運営委員や古いボスに考えてもらいたい。停年の期に考えるのではないと実現しない。

小沼：前の研究部員会議のときに所員が考えていたことは、私の了解では、基研内で、今まで通りの部屋も secretary も使っていただきたいということだ。

牧：山口氏の構想もよいが、現在の文教政策が変わらないと無理だ。

休 憩

〔以下所長退席のままで討議を続ける〕

議長（田中正）：これまでの討論で、湯川先生の停年は認めた上で正式に所長を求め、今後も国際的な研究所として発展をはかれという意見、教授を公募して集団指導でいくという意見が出ている。又、湯川先生にこれまで通り所内にいていただくか、別に大きな研究所的なものをつくっていくかという問題がでてくる。どうやって国際的にもセンター的役割を果す様な研究所を作りあげていくか。

山口：4年間でやってもらうのは大変だ。私は長期的見通しの一つを述べたのだ。

小川：国際性の問題は制度として拡充することは重要だ。これまでもわずかながら外人滞在費があった。国際的にするには、基本的には、基研に代表される日本の物理の activity を高める以外にはない。

山口：2つの lines のうちどちらをとるにしても、問題は実際の人事で良い人が得られるかどうかである。議論はやめて運営委員会にまかせたらどうか。

牧：2つの案のちがいが人の問題で解決されるならそれでもよいが、本質的に差があると思うなら研究部員会議でもっとつめておく必要がある。

山田：抽象論だけではどちらがよいともいえない。

碓井：任期つき教授をとって、所内から任期2年の所長を選ぶということだと、今いる教授も4分の1づつの可能性があることになる。今いる教授の方々は所長の任務もある程度知っておられることと思うが、困難が出てくるだろうか。対京大、対研究者について。

山口：対研究者なら任期2年でもよい。しかし対京大では、新しい計画を実現しようとしても短かすぎる。できるだけ長い方がよい。現状のままなら2年でもよいが、発展させようとする困る。3年～4年がよい。

小川：これからは基研のやり方に対する制約もつよくなってくるだろうが、2年任期の所長ではそれに抗していくことはむずかしいのではないか。

牧：数研も2年だ。基研は小さい。人によってそう考えは変らない。

山口：人が変れば、いくらうちあわせしてあってもニュアンスが変わる。

田中一：基研はこれまで所外の協力も得てやってきた。研究所を拡張発展させる問題と所長任期は別。

荒木：数研は任期2年といっても重任可能。初代所長は停年まで5年つとめられた。現所長は2年後にどうなるか未定だが、停年は3年後である。

山口：私がいっているのは現行制度の4年を特に変える必要がないということだ。

板橋：2年にちぢめたいという積極的理由は？

田中一：所長としてきてもらうなら、長くてよいが、教授を公募して、所内か

ら所長を選ぶのなら、必ずしも4年である必要はない。

山口：所長をまず求めるべきだ。一般論はうちきって運営委員会にまかせたい。

田中一：基研所長は仕事の繁雑さは学科主任位の image でよい。

長岡：人事を運営委にまかせろといわれるが、研究部員会議は具体的人事はおこなわないのか。

山口：普通の人事は一般論だけ。今回は前の例通りでよいかどうか。

議長（田中一）：新しい事態だから、どうきまるにしても研究者との結びつきが必要。

小沼：少し前にもどるが、板橋氏の話に関連して。任期なしの人をよぶなら所長の任期は4年でもよい。しかし任期つき教授をよぶなら、研究のために基研にこられるはずなのだから、あまり長い間、所長をされるのは大変。必要なら重任できるのだから、minimumの単位としては2年の方がひきうけやすいだろう。

山口：逆に2年では何もできないからという人もいることだろう。所長の任期は2年ないし4年としておいて具体的に人がきまったときに、はっきり決めるという方法はどうか。

碓井：湯川所長を決めるときにも運営委員会だけで決めたのではなく研究部員会議で議論した。運営委員会にまかせるといのは無責任だ。

松田：任期つき教授を求めるという案をとるならば、所長4年ということではきてもらえないかもしれない。短い方がよい。

田中一：これまでの手続きをそのまま適用できないかもしれないが、すくなくとも一度は研究部員会議で信任してもらうことが必要。

玉垣：研究部員会議としても少し方向づけをしてもらいたい。任期なしの所長にきてもらうには、自然にそういう気運が出てきて、お迎えするのがよい。それまでは少なくとも数年かかる。その間は、これまでの方針を発展させ続けていくことになる。少なくとも数年間は、任期つき教授を選び、所長任期を2年とするのがよい。

森田：所長には湯川先生クラスの人が欲しい。普通の教授を選び、4人の教授の中から所長を選ぶという案も出ているが、現在の3人の教授は、所長になるという心づもりを持ってこられたわけではない。5年か10年所

長をしてくれるという、学問も所長の仕事もできる、気力のある人が所長になるべきだ。その心づもりをもった人にきてもらいたい。

木下：10年以上というのは任期なしに等しい。任期制までなくしてしまうことはいけない。所長人事か、教授人事かで任期は決まるだろう。どちらをとるかはここできめるべきだ。研究者グループの民主的討論に支えられてやるといっても所長人事は重要だから、まず最適な所長を求める努力をすべきだ。

碓井：所長人事としてきてもらうときには所長の任期がおわったら基研から去ってもらうということか、それとも所長期間は教授任期に数えないのか。

木下：所長の任期がおわったあと、一定期間教授として所内にとどまる。

碓井：それなら教授として人選することにならないか。教授としてきてもらって、所長の期間は教授の任期に数えないのがよい。

末包：いまいる教授も、基研教授として適当だと認められた人たちであり、国際的にも認められているのだから、基研所長としての最低の要求はみたしている。田中一氏は教室主任程度でよいといわれたが、これには賛成できない。その人なりの方向をもっているべきだ。任期はここで決めなくてもよいが、2年よりは長い方がよい。これまで議論して、imageがうかんでこないということは、任期なしの所長としてきていただくのに適当な人が見つからないということだ。したがって任期つき教授をまず選ぶのが妥当ではないか。

議長（田中正）：これまでの討議をまとめてみる。

基研所長は、基研の国際的・国内的な地位・役割を維持し発展させてくれることが望ましい。日本の研究水準を向上させることにも努めてもらいたい。この点については意見の違いはない。これまで湯川先生の果たしてきた役割が大きいので、湯川先生に次ぐ候補者の見通しを得るのがむずかしい。

具体案としては2つ出ている。

	所長任期（再任はさまたげない）	教授任期
A 教授を選ぶ	～2年（所長在任中は教授任期に数えない）	+5±2年
B 所長を選ぶ	～4年	+5±2年

〔この頃所長席にもどる〕

山田：B案をとるなら所長をやめる時のためのポストを1つあけておくことが必要。A, B いずれも、主張する人たちは、それぞれ頭の中に人の image を考えているのだろう。その意味でAかBは候補者の問題だ。

議長（田中正）：研究部員会議は信任投票をおこなう機会をもつべきだ。AかBかまで含めて運営委員会にまかせるか、それとも意見分布を求めようか。

山口：人について不確定のまま意見分布をとるのは適当でない。運営委員会にまかせよう。

牧：信任は人についておこなうのかよい。

田中一：A, B いずれかの可能性も open にしておき、A, B いずれにしたかということと人の名前も出して、運営委員会が原案をつくり研究部員会議が決定するのがよい。これは所長が研究部員会議の十分な support を得る方法だ。

芳田：Aの場合は教授を選ぶことについては信任投票はいらない。

田中一：信任というより承認だ。

山口：田中案を支持する。

小沼：Time schedule はどうなるのか。2月の研究部員会議に出せるように公募がおこなわれるということも考えているのか。

田中一：現職者がいる間に公募をおこなった例はない。

事務長：所長の発令は文部省がおこなうが、4月1日に発令できるためには3月はじめに人選がおわっていないと困るが。

湯川：間にあわなければ事務取扱いでよいだろう。

小沼：配布されている資料に1957年11月15日の研究部員会議議事録抄録というのがあり、所長選出と研究部員会議・運営委員会の関係についての決定・所長任期と教授任期についての決定がのっている。これら2つの決定内容は、今日の結論に変わったのだから、当然のことだがこれら2つの決定は白紙にもどすことを確認しておかないと矛盾を生ずる。

議長（田中正）：前の2つの決定は今日の結論に変えることを確認する。

小沼 }
板橋 } : AかBかは運営委員会にまかせ、所長候補の名前だけを承認事項にす
山田 } べきではないか。

田中一：かりに、だれか具体的名前があがってきたとき、どちらかの立場をとった案になっている。

湯川：明日はどこまでやれるのか。

板橋：Bなら、候補の名前を出すことができるだろうが、Aならどうい分野の人を公募するかという問題があるから2月の研究部員会議まで持ってもらうことになるだろう。

松田：Aのとき、現在在職中の3人から出すか、新しい人を選んでから4人の中から出すかという問題もある。これについては運営委員会にまかせたらどうか。

・所長は専門は関係するか

・原理的に専門と無関係だ。

牧：もしAの場合にはなるべく4人になってから所長を決めた方がよいと思う。しかし時期が非常におくれるならば、対京大のことを考えると3人の中から出さねばならぬことになるかもしれない。

議長（田中正）：問題点が議論できたから、議論の雰囲気も考慮して、運営委員会ですすめられるだけすすめてもらいたい。

沢田：Bにあまりこだわりすぎないよう flexible にしてもらいたい。

結論のまとめ

『湯川先生停年後の基研所長は、基研の国際的・国内的な地位と役割を維持し発展させてくれることが望ましい。日本の研究水準の向上にも努めてもらいたい。』

具体案としては、

A. 任期5±2年の教授を公募し、在職中の教授から任期2年（重任は可能）の所長を選出する。（所長在職中は教授の任期に数えない。）

B. 最初から所長としてきていただく人を選ぶ可能性、その場合任期は所長としての任期4年（重任は可能）と教授としての任期5±2年の和。

いずれの場合にも運営委員会が A, B のいずれを選んだかも含めて所長候補の原案を研究部員会議に示し, 承認を求めるものとする。』

議長(田中正): 京大内の改革案が検討されている。その中で基研に関係あることを報告してもらおう。

湯川: 近く総長選挙がある。評議会のあり方も検討されている。これらについて, 大学問題検討委員会に所員の態度をきめて提出した。(資料)

これに対しては基研はおもいきったことをいうという反響もあった。

松田: 総長選挙に選挙権, 被選挙権を持つのは義務ではないかという意見もあった。

田中一: 大学の傘の下ににいるのだから, 大学自治が正しく発展することに努めるという義務もあるはず。

松田: (大学問題検討委の議論の紹介)

10. 宿舍について

小沼氏から資料2が, 基研・数研の所長会談で確定したむねの報告があった。

小沼: なお, 白川学舎という通称を今後も続けるか否か, 夜集まって話ができるようにたたみの部屋をつくるかどうかという問題が出ているので意見をききたい。この件は最終的には数研と話し合ってきめることになるだろう。

板橋: 白川学舎でよいではないか。

荒木: 数研では, 「白川学舎」という名称に対する反対意見もある。それは物理屋が, これまで通りの考えでいられてはこまるということだ。

木下: たたみの部屋は, ぜひほしい。

沢田: 私も, 白川学舎のたたみの部屋で多くのことを学んだ。白川学舎という名前はこのことをあらわしている。たたみの部屋はつくってもらいたい。

以上
文責 研究部員会議議長団

資料1

所長選考と研究部員会議との関係

1957年11月15日

研究部員会議議事録抄録

討論された主な点

最初次の様な二つの意見がでました。

- a) 一般論に止めてあとで信認投票を行なう。

理由 名前をあげても当人が動けるかどうかははっきりしない場合が多いし、直接名前をあげると討論しにくい点も多い。

- b) 順位をつけないか候補者を数名あげる方がよい。

次に以下の四項目に亘る質問がありました。

- a) 教授と所長を発令する迄の公式手続は同じか (答 同じ)

- b) 所長選考の際必ず教授の空席を確保できるか。

(大部分の教授は5年の任期で交替するので大丈夫と思う。)

- c) 教授選考の際、研究部員はどの程度タッチしているか。

(答 研究部員会議の意向を聞いた時もある。)

- d) 条文によれば所長は京大教授の中から選ぶことになっているが、京大教授でなくても所長になれるか。

(答 少し前に教授にしてそれから所長にすればよい。)

その後「基研のやり方は、他の研究所の模範になるものでなくてはならない」とのコメントがあり、討論の結果次の提案があり、賛成多数で可決しました。

“研究部員会議では、原則論から出発して討議することは必要だが、名前を上げて討議できるなら行なった方がよい。それが運営委員会の決定と矛盾する場合には改めて信任投票を行なう。” その後、1962年6月の研究部会議で、信任投票で所長候補者が信認されるには、研究部員会議の投票で過半数の信任を得ることが必要と定められている。

所長の任期と教授の任期のいずれを優先させるか。

問題になり得る場合

資 料

- a) 基研の教授が任期を一年以上すぎて所長になった場合

所長の任期 > 教授の残存任期

- b) その他の場合

所長の任期 > 教授の任期

(教授の任期は重任を許さない事になっているが、民主的手続を経て所長を決定すれば、所長の任期を優先する特例を認めてもよい) という討論があり、次のように決定されました。

“ a) の場合は所長の任期が終る迄、b) の場合は先づ4年所長をやって、次に残った教授の任期をつとめる。”

以 上

基研所長改選の経過

- 1958年6月研究部員会議

一般論として「共同利用研究所の精神を所長の仕事の中で実現してくれる人」が良いということになり、具体的に湯川所長の再選を希望することになった。

1958年6月 運営委員会

所長選挙 湯川秀樹氏を選出

- 1962年3月 研究部員会議

一般論は1958年と同じ、単記無記名投票の結果、湯川秀樹氏を推薦。

1962年3月 運営委員会

単記無記名投票の結果、全員一致で湯川秀樹氏を選出

1962年6月 研究部員会議

所長候補者の信認投票 全員一致で湯川秀樹氏信任

- 1966年6月 研究部員会議

推薦候補者湯川秀樹に対して、無記名投票を行なった結果、同氏を推薦することになった。

1966年6月 運営委員会

投票の結果全員一致で湯川秀樹氏を候補者として推薦した。

いずれの場合にも、協議員会で、上記候補者が所長に決定された。

資料2

京大基研，数研共同利用研究者宿泊所利用規準

(1969-9-5)

1. 利用希望の情報交換

両研究所はそれぞれの研究計画が決定次第，宿舍利用の希望状況を互いに通知するものとする。通知された内容は，日程選定の参考資料として研究計画世話人に伝達する。

2. 自由使用定員

両研究所は定員各1名を，宿舍利用申込みと無関係に自由に利用できる。この定員の使用に関しては，それぞれの研究所が独自に定める。

3. 長期滞在者

3-1 長期滞在者とは，15日以上何れかの研究所で研究に従事することを認められた者で，通勤可能な範囲に住居を持たない者をいう。

3-2 長期滞在者は，利用開始日を含む週の4週間前の水曜日までに申込みれば，6か月を超えない範囲で優先的に宿舍利用が認められる。それ以後の申込みは，4に述べる一般利用申込みとして処理される。

3-3 前項にかかわらず同時に利用する長期滞在者の数が10名を上まわるときは，優先的使用が認められないことがある。

4. 一般利用者

4-1 一般利用は定員に余裕がある限りいつでも申込みことができる。その場合，利用許可は4-2に述べる順に行なわれるので，留意されることが望ましい。

4-2

I) 受け付けられた利用申込みは，次の2つの枠A，Bに分けて下記のように各々の枠の定員内で利用許可が与えられる。

II) 枠Aの利用許可は利用希望日を含む週の4週間前の木曜日正午(時点a)より開始される。

枠Aの定員は $y = (17 - x)$ 名とする。ただし， x は時点aにおいて既決定の長期滞在者数である。

資 料

時点 a における受付済申込者数が定員をこさぬときは、直ちに利用が認められる。申込者数が定員をこえているときは 5 に述べる順序で調整が行なわれる。時点 a 以後は余裕がある限り先着順に利用が許可される。

Ⅲ) 枠 B の利用許可は、利用希望日を含む週の 2 週間前の木曜日正午（時点 b）より開始される。

枠 B の定員は 5 名とする。

時点 b において未決定の受付済申込者数が定員 5 名をこさぬときは、直ちに利用許可が与えられる。

時点 b 以後は、余裕がある限り先着順に利用が許可される。

5. 利用希望が定員を超えた場合

5-1 利用申込者数が定員を超えた場合は、両研究所は、それぞれ利用日の変更などについて努力するものとする。

5-2 前項の調整は、A については 1 週間程度以内、B については 2 日程度以内に終るものとする。

5-3 5-1, 2 項の調整に極力努力した後なお、利用申込者数が定員を超えるときは、基研、数研、それぞれの利用者総数（自由使用定員および長期滞在者数を含む。）が 17 名と 7 名になるまでは利用が認められる。

この場合の利用者人選は、各研究所にゆだねる。

5-4 前項において、一方の研究所の利用申込者数が優先定員に満たなかった場合は、その分は他方の研究所の申込者が利用できる。

6. 受付の窓口

宿舎利用希望の申込みは、関係研究所の共同利用事務室で受付ける。宿舎利用者決定のための集計は、基研共同利用事務室で行なり。

7. 利用規準の再検討

この利用規準は、1 年間の利用経験の後、宿舎委員会を開いて再検討するものとする。

別紙

例：29日から始まる1週間の中の利用希望は下の表の順にそれぞれの枠の中で許可されます。

日							日 ~
1	3	4	8	15	18	22	29
月	水	木	月	月	木	月	日
→		→		→		→	
長期滞在者		一般利用 A		一般利用 B		利用希望日	
優先受付け		許可開始		許可開始			
(x 人)		(y = 17 - x人)		(5 人)			

資料3

アンケート

“あなたは「基研」を知っていますか？”

京大 基研 物性グループ

京都大学基礎物理学研究所（以下基研と略記する）は、昭和28年創立以来、わが国最初の共同利用研究所としてユニークな役割を果たして来た。然かしながら、最近ややもすれば、利用状況が一部の限られた研究者や、研究分野に固定化される傾向が現われてきたように思われる。そもそも創立以来16年ともなれば、その発足当時の状況がたとえ如何に理想的であっても、幾多の弊害があらわれるのは当然で、基研もこの例にもれないものと考えられる。

前々回及び前回の基研研究部員会議の物性関係部員のインフォーマル・ミーティングに於て、研究部員の顔ぶれ及びその専門分野に固定化のみられることが指摘され、選挙制度に欠陥があるのではないかとということが議論された。基研の研究部員は、物性グループを選挙母体として選出された代議員（物性百人委員会）から選ばれているが、物性グループのメンバー及びそこから選ばれた百人委員には、実験関係者が約半数以上を占めている。一方、基研の利用者及

資 料

びそこで開催される研究会は、その殆どが理論関係であるという基研の特質をかんがみるとき、上記の様な選挙方法が必ずしも適切であるとはいえないように思われる。

上に指摘された問題は単に選挙制度の手直しといった、テクニカルな方法で解決のつくことであろうか？

このような問題が生じた原因は、より深いところに根ざしている。現在日本の研究体制の矛盾のごく一端のみが、我々の目にふれているにすぎないと考えられる。例えば学問の細分化、全体的展望の喪失は、物性物理学という学問自体の特性ともあいまって、論文の過当な生産競争、熾烈な業績主義、更には、予算の重点配分による学問の中央集中化等を生み出している。此等のことが、例えば、基研や物性研の利用者が、あるルートに乗った“陽のあたる場所”の人間に限られているとか、既成の学問分野からはみ出した境界領域の芽が出にくいとか、いわゆる地方大学（この場合、必ずしも地域的に地方にある大学という解釈でなくてよい）の研究者が冷遇されているとか、公募制による就職が必ずしもフェアな基盤の上で行なわれていないとか、若手にエネルギーが感じられない等の問題と関連して尚一層の学問の腐敗、研究者の墮落を結果していると考えられる。

勿論、これらの矛盾は、研究体制そのものの中で、Self-consistentに解消されうるものではなく、その根源に横たわるより本質的な原因を、我々はつきとめなければならない。このような大きな問題を前に、我々は、現研究体制の中のひとつである共同利用研究所の問題ととり組み、隠された矛盾をひき出す手がかりとしたいと考えている。

以上のような我々の意図をお汲みいただき、下記のアンケートにお答え下さいますよう、お願い申し上げます。尚、このアンケートの結果を次回の研究部員会議（11月上旬の予定）に於ける討議の資料にしたいと考えています。

このアンケートは、物性研究者（物性グループ名簿に登録されている研究者）を中心に、生物物理関係の研究者等にお配りいたします。

10月10日までに、「基礎物理学研究所 共同利用事務室」宛お送り下さい。封筒の表に、「基研に関するアンケート解答在中」と朱記して下さい。

(質問の中で、分りにくいもの、答えられないもの等がありましたら、その部分はとばして御解答下さって結構です。)

質 問 内 容

I 共同利用研究所(以下共同利用研と略記)に関して

1 今までに「共同利用研」ということばを聞いたことがありますか。

① Yes

② No

2 「共同利用研」に対してどのようなイメージをお持ちですか。(「共同利用研」の定義、あるいは、あなたの過去及び現在に於ける「共同利用研」に関する知識をお書き下さい。)

3 物性物理学に関連のある「共同利用研」としては、どのようなものがあるか御存知ですか?(具体的に名称を上げて下さい。)

4 共同利用研に関する情報が、全国の研究者に良く行きわたっていると思いますか。

① 相当に良くいきわたっている。

② あまり良いとはいえない。

③ わるい。

④ その他

(情報が良く行きわたっていないと思う場合、どの様にすれば改善されると思われますか?)

5 現存の物性関係の「共同利用研」の現状をどのようにお考えですか?

6 「共同利用研」は存在意義があるとお考えですか?

① Yes

② No

(Yes, No, いずれの場合も具体的な意見, あるべき姿等をお書き下さい。現在の物性物理学の研究体制に対する批評とも合わせてお書き下されば幸いです。)

II 基礎物理学研究所について

1 あなたは基研を御存知ですか?

① Yes

② No

2 あなたは、これまで基研を利用したことがありますか？

① Yes

② No

Yes の場合

② 研究会等に出席。

③ 基研所員と共同研究をした。

④ モレキュール型研究に参加。

⑤ アトム型研究員として滞在。

⑥ その他（具体的にお書き下さい。）

3 2の質問と関連しますが、基研の共同利用として、アトム型研究員、モレキュール型研究、短期研究会、および長期研究会の4つの方式が此迄行なわれています。

a) あなたは、これらの制度の具体的な内容、利用する際の手続きなどを

① よく知っている。

② 多少は知っている。

③ 内容は知っているが具体的な手続きがわからない。

④ きいたことはあるが、よく知らない。

⑤ 全く聞いたことがない。

b) これらの制度が一般に

① よく知られていると思う。

② あまり知られていないと思う。

③ 殆ど知られていないと思う。

④ わからない。

c) これらの制度の知られ方が、中央大学と地方大学で

① 著しくちがうと思う。

② ややちがうと思う。

③ ちがわないと思う。

④ わからない。

d) 貴研究室においては

	しばしば 利用する	時 折 利用する	稀にしか 利用しない	全く利用 しない
アトム型研究員の制度を モレキュール型研究の制度を 短期研究会の制度を 長期研究会の制度を				

e) 稀にしか、あるいは全く利用しない場合、その理由は

- ① 殆ど、又は全く利用の必要がない。
- ② 利用したいが、その方法がわからない。
- ③ 勤務の関係その他で利用できない。
- ④ その他（具体的に）

f) 若手研究者の間でのこれらの制度の知られ方は、古手研究者の間での知られ方と比べて

- ① 相当わるいと思う。
- ② ややわるいと思う。
- ③ ちがわないと思う。
- ④ わからない。

g) 境界領域の研究者によるこれらの制度の知られ方は、既成の領域の研究者による利用のされ方に比べて

- ① 相当わるい。
- ② ややわるい。
- ③ ちがわない。
- ④ わからない。

4 基研の運営が如何に行なわれているか御存知ですか。

- ① 相当詳しく知っている。
- ② 大体知っている。

③ 殆ど知らない。

④ 全然知らない。

5 基研は、共同利用研としてあるべき姿を保っていると思いますか。

① 理想的

② 大体よい。

③ 不満な点が多くある。

④ 全然本来の姿を保っていない。

⑤ その他

(②～⑤はいずれも具体的に改革すべき点などを御書き下さい)

Ⅲ 基研研究部員（物性関係）の選出方法について

1 基研の研究部員の役割について

① 良く知っている。

② 大体知っている。

③ 殆ど知らない。

④ 全然知らない。

2 基研研究部員の選出方法についてこれまで

① 良く知っていた。

② 大体知っていた。

③ 全然知らなかった。

3 前文で説明されたような選出方法を

① 改める必要はない。

② 改めて直接選挙した方がよい。

③ 改める必要はあるが間接選挙がよい。

④ 選挙方法等を云々するのはナンセンスである。

⑤ その他

4 改める必要がある場合（例えば）

① 部員中に若手研究者が必ず1人入るような選挙方法にする。

② 部員中に境界領域の研究者が必ず1人入るような選挙方法にする。

③ 部員中に地方大学の研究者が必ず1人入るような選挙方法

にする。

④ その他(具体案があれば書いて下さい)

(Ⅱ, Ⅲの質問事項は, 北大堀淳一氏の試案を参考に作成しました。

解答欄中, 意見を書くところでスペースがたりない場合には, 別紙の紙にお書き下さい。)

第49回 基研運営委員会議事録

1969年11月8日

於 コロキウム室

議長 湯川秀樹

出席者 田中 一 豊沢 豊 碓井恒丸 小林 稔 井上 健

内山竜雄 永宮健夫 高木修二 小川修三 森 肇

松田博嗣 牧 二郎 玉垣良三

欠席者 坂田昌一 松原武生

議題 1 運営委員の欠員補充について

2 研究部員会議の報告と承認

3 基研のあり方

1 運営委員の欠員補充について

武谷三男氏に学識経験者として運営委員になっていただくようお願いしたが, お引きりけいただけなかったので, 改めてどなたかにお願いするかどうかにについて議論したが, 今回は補充せず, 次回の運営委員会で改めて検討することになった。

又, 研究者の年齢構成の変化に伴い, 学識経験者というカテゴリーも検討すべきではないかという意見も出された。

2 研究部員会議の報告と承認

研究部員会議の報告があり承認された。尚、科研費に関連して次のような討論があった。

小林：今年度は学術会議の意向が尊重されるという前提で試験的にやられたはずだが、今年のやり方が良かったかどうかの検討を科研費委員長はしていない。先の学術会議総会では、“44年度、45年度の結果を学術会議の基本的考えに沿って検討し、それ以後のやり方を決める”ということになった。

又、総合研費Bの枠がふえないのは、文部省より大蔵省の意向、と言われるが、それも文部省の言いのがれの為という見方もある。学術会議は、学審を無視して文部省と直接話すということになると良いのだが、学術会議の内部事情によって対決姿勢もとれない。

玉垣：Bだけでいくとダンプすることは目に見えているので、Aも出すがグループとしてはできるだけ一体的に考えていくというのはどうだろう。

小林：あまり早くあきらめず、学術会議でBをふやす努力をするべきだ。

田中：学審に批判的な意見のほかに学術会議の一部には学審は学術会議が出した方針を実施する機関という見方があって学術会議会員も学審に入った。学術会議の学審に対する態度が一貫していないのではないか。

小林：学術会議には実力は何もない。政府の科学行政のまちがったところを批判していく態度を貫くべきだ。しかし学術会議会員の中にも、かなり学審よりの方がおられる。

永宮：学術会議の勧告も、当初は良いものがいろいろ出された。しかし現在20以上の共同利用研の勧告が出されている。文部省からみると受益者代表の意見をそのまま出していると思われる。

小川：20も出して通るはずはない、不見識だということもあるかもしれないが、私としては20位出るのはあたりまえだと思う。そういう要求もある、ということを出すべきだ。通りそうなものだけ出すのでは、学術会議の意味があまりないのではないか。

田中：かねあいは難しい、勧告内容がよく検討されていないものもあるのは事実、戦前でも1年に2つ位は研究所が出来ていた。ある時点からそれが

なくなった。毎年それだけであれば今たまっている数はそれ程多くないという見方もある。

永宮：研究所は学術会議勧告のみでなく、いろいろの所からの要求でもできているのではないか。

田中：今は共同利用研究所しか出来ていない。

永宮：学術会議は勧告してできても、その後放りっぱなしのところがある。

湯川：今、共同利用研のみできるのも問題だ。要求が20以上あるのはふしぎでない。

田中：充分検討されていないものもある。

永宮：それだけおす力が弱い。

小林：じっくり検討するよう集まる為の予算がない。今でも手弁当が多い。

田中：最近学術会議からの勧告が通っているのは大型計算センターのみ。

小林：それは委員会でちゃんと検討されている。

永宮：学術会議で何もかもやろうとするとできない。

3 基研のあり方

研究部員会議報告の「基研のあり方—所長問題」を参照しながら、まず基研のあり方全般について、次に所長問題についての討論が進められた。

田中：基研は小規模な研究所なので、所長の仕事に馴れるのにそれ程時間はかからないのではないか。

湯川：今までは管理者的工作はほとんどなかった。これからも狭い意味の管理者の仕事は少ないだろう。これからは所外の情勢はしはらく難しい。しかし大学改革の中で共同利用研のあり方をどう考えていくとか、学問上のことなどは所長だけの問題ではない。そういう点には私もお力になりたいと思う。

内山：共同利用研は今まで中途半端な位置だった。

湯川：大学連合のようなところの下に入る可能性もあるが、簡単には考えられない。

井上：京大では大学問題検討委員会で、来年6月答申をメドに、改革案が検討されている。今まで一般的には基研の位置づけをはっきりさせていなか

った。今度ははっきりすることになるが、そこで急に困ることになるとは思わない。

牧：月曜会でも共同利用研の現状について各研究所から報告があり，問題点が出しあわれた。共同利用研の共通の問題をまとめておくことになり，私が草案を作って今各研究所で見てもらっているが，反対意見も出ている。他の研究所の報告を考慮し，かなりやわらかい表現をしているにもかかわらず，相互尊重，相互不干渉という点など基研の考えが強く出すぎていると言われる。

小林：今までは，いじわるされない程度で，そうかまってもらえなかった。プラズマ研は相互尊重，相互不干渉路線で独自に文部省交渉をしている。

碓井：名大の中にプラズマ委員会はあるが，ほとんど開かれない。

田中：基研は運営の仕方が特殊ということもあるが，湯川，小林という人材の為，共同利用研究所としての主張を通してこられた点もある。

湯川：初期は文部省の考えも良かった。

小林：はじめは共同利用研を育てる気運があった。

井上：基研の16年の歴史は強い，それを守る方向で extend していくことは可能。

湯川：大学改革案の中に，一般の附置研は学部と一体化，共同利用研は大学から離れるという線も出ているが ……………

田中：大学から離れるというとき，共同利用研の足並がそろうか。

牧：阪大の永宮委員会報告に，“蛋白研は共同利用研としての性格を徹底するか，もっと阪大と強く結びつくか”だとあったと思うが。

永宮：蛋白研に限定して述べているのみで，共同利用研全体については考えていない。蛋白研は共同利用研として運営しているが，現状はかなり学部とくっついている。他と接触しながら中にうづまるという傾向にある。

松田：蛋白研の人事はどうなっているか。

高木：外部の人も入った所で決める。

湯川：数研は実質的に内部で決める。

プラズマ研：運営委員会のような所

核研：“

物性研：人事協議員会（物性小委で推薦した所外と所内の人から構成される。）

田中：実質的に外部の人で決まるかどうかだ。試案は好意から作られるのだと思うが、所内で試案が作られて、かけられるとそのまま通りがちな。

基研はうまくいっている。核研は少し違う。

湯川：基研のやり方は非常に簡単なやり方だ。所内では原案を作らず、研究部員会議や運営委員会で討論しながら決めているが、処理すべきことが多いと、これではいけないかもしれない。

永宮：所長の力もある。建設的な意見を出されうまくやってこられた。物性研は、20部門もあり、分野もバラエティにとんでいるので難しい。

田中：核研のような大きな所でも、このようなことができないとはいえない。分野毎の予算の配分も原案なしにできないことはないのではないか。

永宮：実験の人は、どうしても装置と金が頭にある。

松田：研究部員会議で所外の人が議長をするのも特徴的だ。開かれるのも物性研は年2回、1日ずつだ。

永宮：物性研は短期研究会が多く、原則的なことを議論する場があまりない。

内山：部員会の議論が最近無駄が多いように思うが、

永宮：無駄なことをやりつつ back ground を作っている。実務的なことばかりしていると short range にはよいように見えるが long range なことが考えられない。

所長問題

湯川：部員会で出た A, B 2つの case は判断の手がかりになると思う。

小川：これからはしんどいことがあるような気がして、昨日は所長の leadership を強化する方向の発言をしていたが、実際には個人におんぶして、それがのりきれるか心配だ。集団指導制で所外の人助力も得る方がよいように思う。A案でいくと所長の交代期のある期間は、新旧所長が所内に同居することになる。その期間は二人の協力体制もよいのではないか。

内山：湯川先生を前にして言いにくいですが、今まで所長の考え方、ability が

第49回運営委員会議事録

役立つというのは、湯川先生を別にして他の研究所ではあまりないのではないか。むしろ良い professor を選ぶべきだ。

広島理論研は交代でやっている。出来たはじめだけは所長の力があるが、その後は所員全部の努力が必要。

湯川：蛋白研も始めは赤堀氏の leadership で運営されたが、その後は順番にやっている。

永宮：基研は本当の意味の全国共同利用研究所だ。研究所としての本質をはたしながら全国を中心となるには、連続的な構想で発展する必要があるのではないか。

湯川：基研のような所にいると否応なく全国的なことを考えねばならない。

田中：現在としてはAの方が良いのではないか。

湯川：学問の変化は早くなっている。私はどうにか長くやってきたが、これからは長くと言うわけにもいかないのではないか、大学改革の気運の中で学長、学部長の年代も変わった。

田中：B案でいくと、4年+(5±2)年で停年になる人で52~3才の人という image になる。

内山：Aならもっと若くなる。その方が活発な研究所になる。

湯川：基研の所員は任期もあることだし、うんと若い人をとる方がよい。又、誰が所長になってもかかえる問題に若い研究者の数がふえて、小研究所ではカバーしにくいということがある。

田中：若い人との contact という点から、所員がそれに近い層ということも大事だと思う。

湯川：Bとするとき名前を出さずに話が進められるか。 — できない —
では名前を出しても良いか。

名前を出さずにA、Bの choice ができるか。

永宮：Bで来ていただきたい人があるにしても、そういう人が果して移ってこられるとは限らない。

湯川：はっきりしなくても、可能性があると思われる人はある。

内山：人材はあるとしても、その人が引きうけてくれるかどうかで迷う。

田中：良い人程、来ていただくのが難しい。無理をしてまでBをとるか。

内山：外国にいる人はもちろん，国内の人でも，現在の大学を離れにくいこともあるだろうし，家のこと子供の教育などの条件を考えると動きにくい。

豊沢：Bが難しいというのは，任期と年令の関係以外の factor が入っているか。

湯川：Bではそれ程若くならない。

内山：所帯が大きく，任期がきれても京大でひろってくれるのならよいが，

田中：多くの人も数人の名前を考えられたと思うが，それでもBにまとまらなかったのは，来ていただけるかどうか難しいと思われたのではないか。

碓井：Aを積極的におされる理由は何か。

玉垣：部員会や運営委員会の leadership がよりはっきりする。

田中：中途半端はよくない。leadership か，集団かのいずれかであるべきだ。

内山：いつまでも基研は良い所であって欲しい，良い教授がいれば所長は誰でもよい，将来すばらしい人が出てきたらBでも良いが，Bは particular case で普通はAだ。

湯川：Aは集団指導というより若がえる点が良い。任期があるというのは次の可能性があるということであり，若くなくては困るということだ。

永宮：Bになるには，自然の時を待つということか。

内山：AにもBのような可能性も含まれる。他薦の形でBに近い人が入ることもある。

田中：A，B は分けた方がよい。但し，Aにして年配の人を望むという原則をつけたりしなければよいが，Aの場合，教授公募をしても一年はかかる。任期は2年だから現職の3人の中から所長を選び，2年後所長の任期がきたときに新しい教授が加わった4人の現職の教授の中から所長を選ぶのがよい。

内山：場合によっては，今，現職の教授の中から所長を選び，2年の間に教授を選んでよい。

永宮：研究所としては，やはり原則としては permanent な方が欲しい。

内山：次の所長は損だ。

湯川：歴史を忘れることも必要。

第49回運営委員会議事録

田中：Bが本当に生きるのはしばらくあとの方が良い。先程の方法をとるにしても、今日具体的に人を決めなくても良い。次の部員会の第1日にこの方法をとって良いかをはかり、その夕方運営委員会を開いて現職の方の中から選出し、翌日、その人について部員会で信任をとればよい。

内山：公募後にするとAにせよBにせよ1年位おくれる。

Aのやり方に2つの方法がある。

{	A ₁ ……	新しい教授が決して4人の教授の中から 所長を選ぶ。
	A ₂ ……	現職の3人の教授の中から所長を選ぶ

田中：A₂の場合、教授公募は“若い人でかつ所長候補”としてもできる。

A₁とA₂の違いは1年を過渡期にするか、2年を過渡期にするかの違いだ。1年だけ所長をしていただくのは所員の方に失礼にならないか。

永宮：中途半端は失礼だと言われるが、所員の方はその方がありがたいのではないか。公募して来ていただいた時点で、もう一度考えたらどうだろう。

松田：A₁でいくと、結局3年やらされるということにもなりうる。

永宮：A₂なら新しく教授として来られる方は、1年は所長にならなくてよい。

田中：それだけ教授を選考する範囲が広がる。

内山：この辺で決をとったらどうか。

松田：Bの可能性をすてる意味がはっきりしない。

豊沢：Bについて具体的な名前を全然出さずにAにする、というので部員会が承認するだろうか。conditionが。

永宮：Bが強く出されなかったのは、名前が出せないとその人のboundary conditionがどの程度あるかわからないということもある。

湯川：人の名前を出すと複数の人名があかるだろうし、あとがかなり難しい問題になりうる。名前を出すのはとてもcriticallyなステップだが、それをやるか。

永宮：本来ならそうなるべきだが、危険だ。

田中：Aをとるのは必ずしも消極的ではない。AにはAの良さがあることも考えるべきだ。

高木：永宮氏の言われるのはAのmeritを認めても、それを超える人があればBをとるべきだということ。

田中：Bをとるにしても現在の時点ではAだと思う。

Bにふさわしい人があったとしても来ていただけない可能性があるし

Aの良い点として ・若い人になる

・忘却期間も必要

・部員，運営委員の積極的役割がますということ
がある。

高木：Bは人による。BでもAの良さが消えさるとはいえない。

松田：現時点では practical に A ということか。

永宮：Bでも気楽に考えうる。

高木：任期4年はかなりきつい。

田中：所員は任期を守っていて顔ぶれが変る。Bのときは所長の任務は強い。

牧：決をとった方がすっきりするが，A，B いずれにしても所内の運営委員
は，所員としての立場がからむといけなから棄権した方がよいのでは
ないか。

—— 所内の意見も入るべきだし，投票した方が良いという意見が強い ——

豊沢：ほとんどAに賛成だが，具体的な image がうかばないので，素粒子の
人ほどはっきりした票ではない。

森：共同利用を徹底させ，学問的には，境界領域を開くということが，原理
的に個人の力でできるか疑問。朝永先生が10年若かったらというよう
なことがあれば別だがAに賛成。

湯川：投票が良いか，挙手か 投 票

記名か無記名か 無記名

Aに対する可否投票，無記名の結果

可 13

白票 1

となり，A案でいくことになった。

第49回運営委員会議事録

。次の部員会の途中で運営委員会を開き、投票を行なうこともありうる。

。又、 A_1 、 A_2 どちらの方法にするかの議論があったが

1. 空白期間が長すぎると困る。

2. 任期1年の所長も困る。

ということで“実質的に A_2 ”という意見が大勢をしめた。

以 上

文責 片岡 韶 子